

今週の為替相場見通し(2019年9月2日)

総括表		先週の値動き		今週の予想レンジ
		注	レンジ	
米ドル	(円)		104.46 ~ 106.68	105.00 ~ 107.50
ユーロ	(ドル)		1.0963 ~ 1.1164	1.0700 ~ 1.1100
(1ユーロ=)	(円)		116.58 ~ 118.22	115.00 ~ 117.50
英ポンド	(ドル)		1.2140 ~ 1.2310	1.2000 ~ 1.2350
(1英ポンド=)	(円)	*	128.21 ~ 130.39	126.50 ~ 132.50
豪ドル	(ドル)		0.6690 ~ 0.6788	0.6650 ~ 0.6800
(1豪ドル=)	(円)	*	69.97 ~ 72.08	70.50 ~ 72.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 菊池 雄太

(1) 今週の予想レンジ: 105.00 ~ 107.50 円

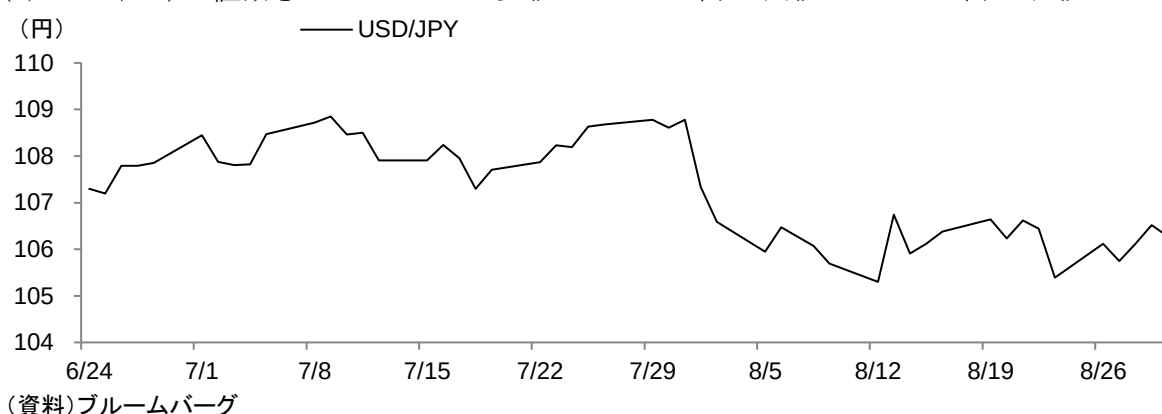
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週初に安値をつけ、その後反発する展開。週初26日に105円台前半でオープンしたドル/円は、米中間での追加関税賦課を巡る攻防を発端としたリスクオフムードの中で、一時週安値となる104.46円まで大幅下落した。しかしその後、トランプ米大統領が中国側から貿易交渉を再開したいと連絡があったと発言すると、一気にドルが買い戻され、106円を上抜けるとストップを巻き込みながら106円台半ば近辺まで急騰した。その後は売り戻りに106円付近まで値を下げ、翌27日は米中摩擦への懸念が根強い中、ドル/円は105円台後半まで下落した。28日はジョンソン英首相が議会休会を要請したとの報道や、イタリアの政局不安からポンドやユーロが売られ、ドル買いの流れとなったことで、ドル/円は106円台前半までじり高で推移した。29日は米長期金利の低下にドル/円は105円台後半まで弱含んだものの、中国が米国に対するさらなる報復措置を取らないことを示唆したことから106円台前半まで反発。さらに、トランプ大統領が米中の対立解消に向け、29日中に「異なるレベル」での協議を行う予定と発言するなど、米中通商協議進展への期待から一時週高値となる106.68円をつけた。30日は8月ミシガン大学消費者信頼感指数確報値が89.8と速報値92.1から下方修正されたこともあり、106円台前半まで下落し、106.27円付近で週越した。

今週のドル/円相場は上値の重い展開を予想する。9月1日トランプ米政権は、中国製品に対する制裁関税「第4弾」発動し、中国も同日即座に750億ドル規模の米国製品に5~10%の追加関税を課す報復措置を実行した。今後の米中協議に注目が集まる中、両国の政府関係者は9月上旬にワシントンで閣僚級の貿易協議再開に向け調整中とのスタンスを示しているが、不透明感は強い。米中貿易摩擦の長期的な影響もあり、マーケットではリスク回避の姿勢も出ている。この状況下、今月17~18日に開催されるFOMCでの利下げ見通しが広がる中、利下げの材料の一つとなる米8月雇用統計が6日(金)に発表される。8月の非農業部門雇用者数については7月並みの前月比+16.2万人、失業率も3.7%と7月から横ばい、平均時給は前年比+3.0%と7月(同+3.2%)からやや減速が市場では予想されている。予想通りの数字が出てくれば、大幅な利下げ期待の剥落でドル買い材料となりそう。今週は米雇用統計があることから方向感が出にくいながらも、米中貿易摩擦の懸念などから上値の重い展開となりそうだ。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/26~8/30)の値動き: 安値 104.46 円 高値 106.68 円 終値 106.26 円



2. ユーロ

為替営業第二チーム 原田 和忠

(1) 今週の予想レンジ: 1.0700 ~ 1.1100 115.00 ~ 117.50 円

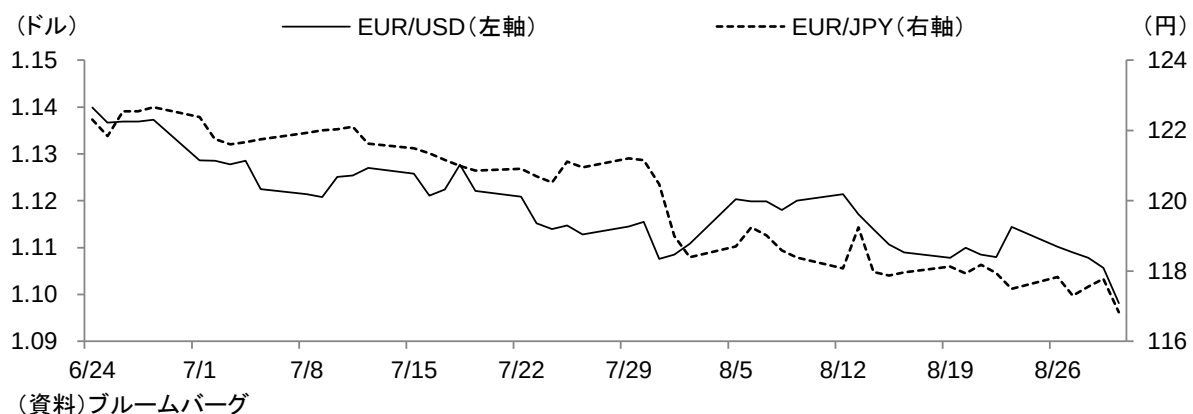
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

今週のユーロ/ドル相場はじり安の展開。週初26日に1.11台半ばでオープンしたユーロ/ドルは、一時週高値となる1.1164をつけたが、その後はトランプ米大統領が中国側から貿易交渉を再開したいと連絡があったと発言すると、ドル買い戻しに1.11付近まで下落した。27日は、独4～6月期GDP改定値が速報と変わらずマイナスであったことから続落し、ギントスECB副総裁が「低金利が長く続く」と発言したことも重しとなり1.10台後半で推移。翌28日も、ドイツのリセッション懸念やイタリア政局不安に加え、英国の合意なき離脱への懸念からユーロ/ドルは軟調地合いが継続した。29日には、ラガルドECB次期総裁が「ECBには幅広い手段がある」と発言したことから1.10台半ばまで下落。その後、クノット・オランダ中銀総裁が資産購入の再開が正当化されるほど欧州経済は弱くないとの見方を示すと一時1.11手前まで反発したが、米中通商協議進展への期待からドル買いが強まると、ユーロ/ドルは1.10台前半まで値を下げた。30日も独7月小売売上高をはじめとする経済指標の低調な結果や、9月ECB政策理事会での金融緩和の思惑にユーロ/ドルは軟調な動きが継続し、1.10を割り込み一時約2年ぶりの安値となる1.0963をつけ、1.09台後半で越週した。

今週のユーロ/ドルは引き続き軟調推移を予想する。英国ではジョンソン首相が議会の閉会を発表。9月3日に夏季休暇明けで再開される英国議会は、再開後1週間程度で閉会となる見込みである。つまり、ブレグジットの期限である10月31日に向けて十分な議論が議会の場で議論が行われることなく、ブレグジットに突き進むこととなる。軟調だった独Ifdをはじめ、独4～6月期実質GDP成長率についてもマイナスとなっており、欧州圏の景気減速が懸念される。尚、4～6月期のGDP成長率に関して言えば、イタリアはゼロ成長、フランスも前期比+0.2%と主要国において軒並み精細を欠いている。ECBのハト派スタンスや、特に今まで経済を牽引してきた主要国経済の弱さ、ブレグジット情勢に鑑みると、ユーロを買いづらい展開は変わらず、下落モメンタムは継続しそうだ。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/26～8/30)の値動き: (対ドル) 安値 1.0963 高値 1.1164 終値 1.0991
(対円) 安値 116.58 高値 118.22 終値 116.84



3. 英ポンド

欧州資金部 川田 夏生

(1) 今週の予想レンジ: 1.2000 ~ 1.2350 126.50 ~ 132.50 円

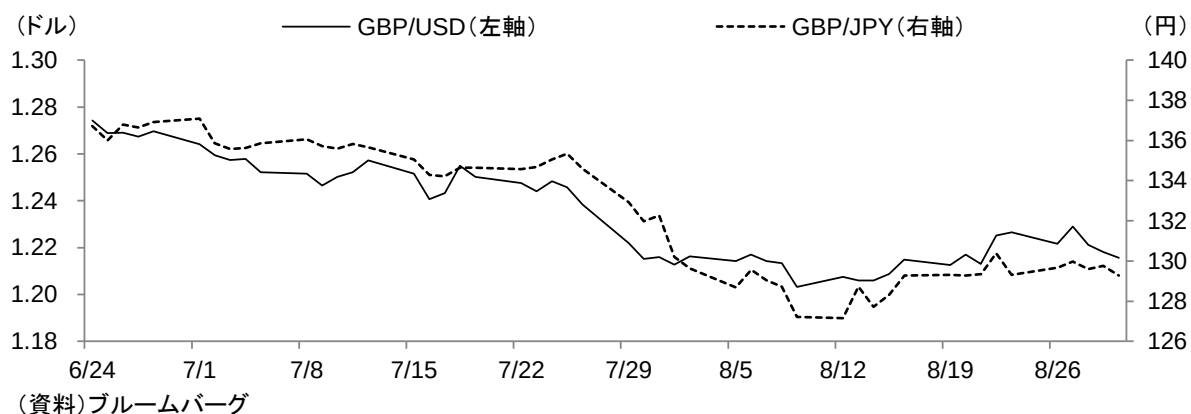
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、10月末に離脱期限が迫り合意なき離脱への警戒感が高まるなか、ジョンソン英首相および英野党らそれぞれの離脱対応策に係る動向に振られながら安値圏でのみみ合いとなった。ジョンソン英首相はアイルランド国境に関するバックストップの撤回を望みEU側と会談を実施。EU側は英代替案検討の余地を見せたが撤回への理解は示しておらず、26日にジョンソン英首相がバックストップに関して歩みよりができなければ合意なき離脱を選ぶと言明。英ポンドは英休場のなかでじりじりと下落し1.227台から1.221台へ。27日には英野党労働党コービン党首が合意なき離脱阻止のためにあらゆる措置を講じると表明。英野党ら連携への期待が高まり、英ポンドは上昇し一時1.2310を付けた。しかし、28日にジョンソン英首相がエリザベス女王に議会閉会を要請する可能性が報じられると英ポンドは急落し1.2156を付ける場面が見られた。同日に政治的中立の立場であるエリザベス女王が9月中旬から10月14日までの議会閉会を承認。ジョンソン英首相は10月末の離脱期限まで英議会開会期間を制限し、自身の合意なき離脱計画の阻止を回避する手段をとっており、合意なき離脱懸念が高まったことから、英ポンドは1.22台前半で上値重く推移。上記の議会閉会により審議期間は大幅に短縮されたことを受けて、29日に英野党労働党は翌週の議会で緊急審議の実施を目指すとして、議会再開次第、合意なき離脱阻止に着手すると述べたものの、英ポンドはじりじりと下落して1.21台で週を終えた。

今週の英ポンド相場は、英議会の休会明けとなり、英野党らの合意なき離脱阻止に向けた対応動向に注目が集まる。英議会の審議期間が大幅に短縮されており、英野党らの対応模索は厳しいものになることが想定される一方で、EU側との交渉余地が残されていることから、英ポンドは1.2000から1.2350の安値圏での推移を予想。9月3日に英議会開会となるが、9月9日の週から10月14日まで閉会し、10月17～18日開催のEU首脳会議の直前、10月31日の離脱期限まで3週間弱と、英議会審議において非常にタイトなスケジュールとなる。野党らはジョンソン政権に対する不信任投票を検討し挙国一致内閣樹立を構想するも、自由民主党や保守党の一部はコービン労働党党首を同内閣党首とすることに反対の姿勢を示しており、内閣樹立へのハードルは高い。また、野党らは、ジョンソン英首相に対してリスボン条約50条の適用延長要請を義務づけるための法案可決を目指すことを表明。今週の動きにおいて、野党が挙国一致内閣樹立と法整備のどちらのプロセスを進めていくのか、そして9月7日・8日の週末に議会開会を模索との報道も出ているなか、短い審議期間での対応が現実的に可能な手段なのか注目が集まっている。英ポンド相場は関連ヘッドラインに振られる展開と考える。ジョンソン英首相は離脱合意案の修正のため、9月に週2回のペースでEU側と協議する方針を示しており、EU側が英代替案についての協議に前向きな姿勢であれば、一時的に英ポンドのサポート材料になると思料。また、欧州各国のPMIが注目されるなか、英8月製造業PMIの公表を9月2日(月)に控えているものの、現在BOEは離脱動向を最も注視していることから、本指標が英ポンド相場の材料にはなりづらいと考える。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/26～8/30)の値動き: (対ドル) 安値 1.2140 高値 1.2310 終値 1.2166
(対円) 安値 128.21 高値 130.39 終値 129.27



4. 豪ドル

為替営業第二チーム 綱島 正侑記

(1) 今週の予想レンジ: 0.6650 ~ 0.6800 70.50 ~ 72.00 円

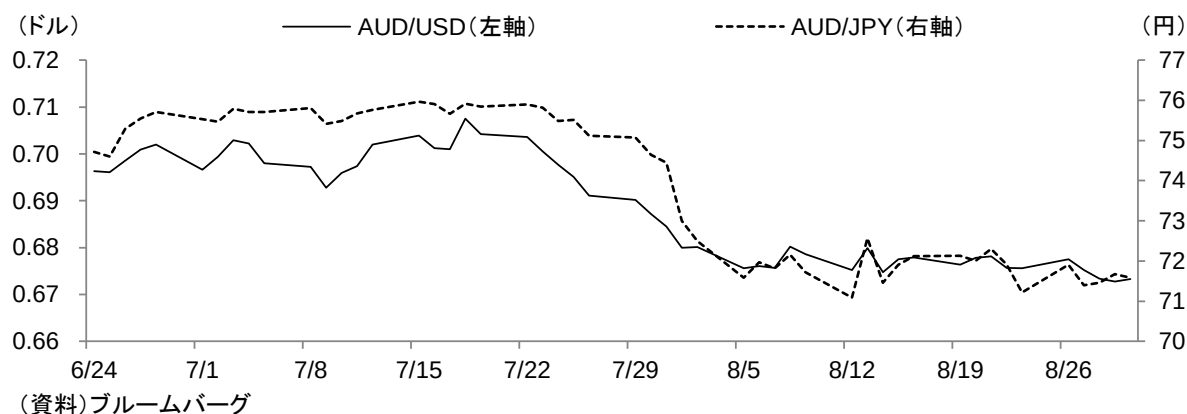
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、0.67台で上へ行って来いの展開。前週のNY市場クローズ後にトランプ米大統領が対中関税引き上げを表明したことを受け、ギャップダウンしてオープンし一時0.6690まで下落となったがその後反発。欧米時間入り後、トランプ大統領から貿易協議に対する楽観的なコメントが出ると上昇幅を拡大し0.67台後半まで上昇幅を拡大した。27日、デベールRBA副総裁の「豪ドル安は経済成長とインフレ率と言う観点で有益となる」との発言が材料視され、豪ドルは売りが優勢となり0.67台半ばまで反落。28日、中国人民銀行が人民元中心レートを市場予想より高めに設定したことから通貨安競争懸念が後退したことを受けて豪ドルは0.6760レベルまで小幅上昇。しかしながらその後発表された豪2Q建設支出が約3年ぶりの低水準となったことを受け、豪ドルは売られ0.6730台まで反落し、その後は0.6740近辺でレンジ推移となった。29日は0.6730台を中心にもみ合い。朝方発表された豪2Q民間設備投資が市場予想を下回ったことを受け一時0.6717まで低下したが、中国商務省が定例記者会見で米国の制裁関税引き上げに報復しない方針を示唆したことから、リスクセンチメントが改善し0.6750近辺まで反発。しかしながら豪ドル買いは続かず北米時間以降は上値重く0.6730近辺まで反落。30日、豪7月住宅建築許可件数が発表され市場予想を下回る結果となったことを受けて一時0.6706まで下落。しかしながらその後は下値を追う展開とはならず反発し0.6740近辺で越週。豪ドル円は週初70円台半ばで取引を開始。週末の対中関税引き上げとの報道を受け一時72.00円近辺まで下落する局面も見られたがその後は一時72.00円近辺まで反発。27日、72.00円近辺では上値重く、じりじりと上値を切り下げ71円台半ばで推移となった。28日も方向感なく推移したが、29日に中国商務省が米関税引き上げに対する報復をしないと発表したことから一時71.80円近辺まで小幅反発したが、大きな値幅とはならず、30日には71円台半ばまで値を戻し越週。

今週の豪ドル相場は引き続き上値重い展開を予想。引き続き米中貿易をめぐる不透明感は継続しており豪ドル相場にとっては重石となろう。また、3日(火)にはRBAも予定されており、今月のFOMCにおいて米利下げが予想されている中でRBAについても引き続き緩和的なスタンスを取るものと予想されよう。一方で直近0.6700割れの水準では二度(8月7日、26日)反発しており、底堅さが感じられる値動きである。そのため0.66台が定着するには新たな材料が必要となると想定しており、積極的に下値を追う展開とはなりにくい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/26~8/30)の値動き: (対ドル) 安値 0.6690 高値 0.6788 終値 0.6737
(対円) 安値 69.97 高値 72.08 終値 71.59



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。